新保雅浩君のこと
――思い出すままに――

橋　本　郁　雄

Ⅰ．出会い

私が早稲田大学の大学院に出講したのは、かれこれ30年もむかしのことになる。当時大学紛争の嵐が全国的に吹き荒れていたが、とくに早大の紛争は私の本務校であった一橋大学とは比較にならぬほど激しかった。バリケードが築かれて大学の構内に立ち入ることができず、やむなく近くの喫茶店で授業を談話会に切り換えたこともあった。しかし新保君が大学院に進学した昭和45年には紛争も峠を越し、演習室でテキストを読むことができるようになっていた。

ここまで書いたとき、ドイツに研究出張中の筑波大学の石塚茂清教授から便り（2001年8月6日付）が届いた。絵葉書には、

「…… Mainz の Gutenberg-Museum のうす暗い部屋で Gutenberg の『聖書』を見ながら、この町にいた新保君のことを切なく想い起しました」

とある。

偶然とはいえ、時を同じくして石塚君も新保君の上に想いを馳せていたのである。石塚君は早大で新保君の一級上で、ふたりはいまは亡き大木健一郎教授の指導の下、中世ドイツ語の手ほどきを受けた仲間であった。のち両君は筑波大学の同僚として、石塚君は『ニーベルンゲンの歌』、新保君はさらに時代を遡り、『オトフリートの福音書』の研究に専念した。とりわけ新保君の主著《Wortindex zu Otfrids Evangelienbuch mit alphabetischem und rückläufigem Wortregister》（Max Niemeyer, Tübingen 1990）は筑波大学在職中の注目すべき業績であった。

ところで、石塚（当時高橋姓）・新保両君は大学院時代拙宅を訪ねてくれたことがあった。忘れっぽい私がその日のことをはっきり憶えているのは、新保君が私の蔵書をみせてほしいと言ったからである。当時の私の蔵書は

他人様にお見せできるようなものではなかった。ありふれた廉価本ばかりで、珍書や稀覯本の類は皆無に近かった。しかし、すげなく断ってはせっかくの和気藹々たる雰囲気がぶちこわしになる。やむなくどうぞということになって、雑書が散乱した書斎に案内した。新保君はときどき書架から本を引き抜いてはページを繰ったりする。幼稚な書き込みのあるものもある。私はなんとなく落ち着かなかった。その時のことが妙に忘れられない。

II. 小林英夫編『私の辞書』(丸善　1973年刊) をめぐって

昭和47年3月に修士課程を終えた新保君は、2年間慶應大学の工・商両学部の非常勤講師を勤めた。丸善から『私の辞書』と題する本が出版されたのはその頃であった。本書は丸善のPR誌「學鐙」(編集長はフランス文学者本庄桂輔氏) に連載されたシリーズ《私の辞書》129篇の中から47篇を選んで一本に纏めたもので、編者はソシュールの『一般言語学講義』の訳者として知られる小林英夫氏。『私の辞書』は世界の主要言語を網羅した解説書で、当時朝日新聞 (昭和49年1月28日付) に「類のない手引書」として大々的に紹介された。英語については、数ある解説の中から福原麟太郎、西川正身、上野景福の三氏、フランス語では渡辺一夫、三宅徳嘉両氏、いずれも斯界の権威の味のあるエッセイが選ばれた。ところがドイツ語については弱輩の私の一篇だけであった。フランス語の解説者がふたりなら、ドイツ語の解説者も同数が期待されるのではなかろうか。新保君もドイツ語が継子扱いされたように感じたらしく、当時早大に出講していた小林英夫教授にこの点を直接質したという。新保君はすでに修士課程を終えていたが、言語学者の小林教授とはコンタクトがあったらしい。新保君によれば、拙文が辞書づくりをめぐる先人の失敗や苦心談のエピソードを織り交ぜながら、興味深く辞書の成立を語っている点を小林教授は評価したとのことであった。私は小林先生に認められたことを嬉しく思ったが、しかし、ドイツ語の辞書がフランス語の辞書と対等に扱われなかったことは不満であった。

Ⅲ．古都での二年半

昭和49年4月、新保君は龍谷大学の文学部に専任講師のポストを得た。奈良に住み、京都に通う生活だった。東京っ子の新保君にとって、京都の生活は格別楽しかったらしい。謡曲（観世流）に親しみ、古寺巡礼を通して仏像の撮影に熱中したという。当時関西に在って新保君と行を共にすることの多かった義兄の藤原忠氏が、通夜の夜、文字通り夜を徹して書いた長文の手記『マーちゃんの思い出』の記は、愛する義弟の早逝を悼む眞情が迸り、読む者を感動させずにはおかない。

古都の生活は短い間ではあったが、新保君の学問にも大きな影響を与えた。とりわけ京都の石川敬三先生を中心とする中世ドイツ文学の研究会を通して、若い新保君が受けた学問的刺激は大きかったようだ。新保君がわが国の中世ドイツ文学研究の大先達である石川先生のことを深い尊敬をこめて語ってくれたのが、深く印象に残っている。彼は東京へ移り住んだのちも、折りにふれ、京都詣でを楽しみにしていた。

Ⅳ．筑波時代

昭和51年10月、新保君は筑波大学に移った。筑波大学で過ごした十数年は、新保君にとってもっとも充実した時期であった。古高ドイツ語の研究に没頭し、数多くの論文を発表した。Otfridの福音書のシンタクスに関する研究が中心になっているが、この雌伏期を経て、新保君の学問は一段と深みを加えた。この間、東大の岸谷敞子教授を囲む中世ドイツ文学の読書会に熱心に参加するなど、絶えず切磋琢磨を怠らぬ新保君の勤勉さには目を瞠るものがあった。

昭和63年、気鋭の新保君は、フンボルト財団奨学研究員として一年間マインツ大学に留学することになった。それは新保君にとって大きなチャンスであった。新保君は同大学のW. Kleiber教授、とりわけA. Greule教授と親交を深め、その助力もあって、1990年にゲルマニスティク専門の老舗Max　NiemeyerのIndexシリーズの一冊として念願の《Wortindex　zu

Otfrids Evangelienbuch》が刊行され、学界の注目を集めることになる。

V．学習院大学へ

平成3年4月、新保君は学習院大学文学部ドイツ文学科に教授として迎えられた。温厚篤実な人柄と深い学識に惚れ込んだ川口洋教授の推挽によって実現した快人事であった。ときに新保君は45歳。まさに洋々たる前途が約束されていた。定年退職を2年後に控えた私にとって、同僚として新保君とつき合うことができたのは、この上ない喜びであった。

新保君は、われわれが期待したように、いや、期待した以上に、教育と研究の両面において活躍した。まさに八面六臂の活躍であった。本誌『研究論集』の創刊号の序文によれば、本誌の誕生も新保君の発案と努力に負うところ大であったという。新保君自身も第3号に『歴史的ドイツ語研究におけるコンピュータ利用の現状と可能性』(第1部)と題する論文を寄せている。あれを思い、これを思うとき、新保君の早世が惜まれてならない。

Ⅵ．比翼連理

ある夏の一日、わが家の月下美人の蕾が膨らみ、今夜あたり満開かと見えた。いい機会だから新保君ご夫妻をお招きしようということになって連絡すると、欣んで参上するとのこと、妻は大急ぎで準備にとりかかった。

わが家の月下美人は大畑末吉先生の奥様ご丹精の株を分けていただいたもので、大事に育ててきた四株が毎夏数十もの大輪の花をつけ、夜が更けると芳香を放ちながら開花する。満開は眞夜中の数時間、花のいのちはあまりにも短いが、馥郁たる香気と妖艶な美しさは形容を絶する。

咲きすすむ力にゆれて女王花（下村非文）

私たちは、漂う芳香に酔いながら、飲みかつ語った。

ゲステブーフを開くと、1993年8月1日のページに新保君と武子夫人のサインがあって、そのあとに私が「比翼連理」と書き添えていた。

あの晩あんなに楽しく喋った新保君は今は在さぬ。淋しい。底知れぬ淋

しさである。

2000年1月12日新保君は忽然として世を去った。入院中の新保君と電話で話したのが最後となった。あのときの新保君の声がいまも耳朶に新たである。

［後記］

2001年8月上旬から3か月余り、私は残胃癌の切除のために入院した。本稿はその折病院のベッドの上で綴った草稿を基にしている。体調整わず意に満たぬものとなったことを故人に詫びたい。（2001年11月3日記）

（学習院大学名誉教授）